

景観色彩の誘導【1】—川崎市臨海部色彩ガイドライン

Leading of Color Designed for Landscape【1】

—Color Guide Line for Manufacturing District in Kawasaki

永田 泰弘
吉田 慎悟

カラープランニングセンター
川

Yasuhiro Nagata
Shingo Yoshida

1 はじめに

川崎市川崎区の臨海部に立地する工場および港湾施設の景観色彩をより快適感のある状態に誘導するために、川崎市は色彩ガイドラインの策定を企画し、我々は委託を受けてカラーシステム提案を行った。

以下にその概要を紹介する。

2 アンケート調査

システム検討に先立ち、対象地区(2000ha強)内の約400社の事業所あてに、24項目からなるアンケート調査を実施した。回収率は約30%であった。

内容は川崎の臨海部に対する現況のイメージ、将来こうあって欲しいというイメージを始め、市役所主導の色彩誘導の可否やその内容、個々の事業所の色彩基準、建屋や施設の塗替えや新築に関わるものである。

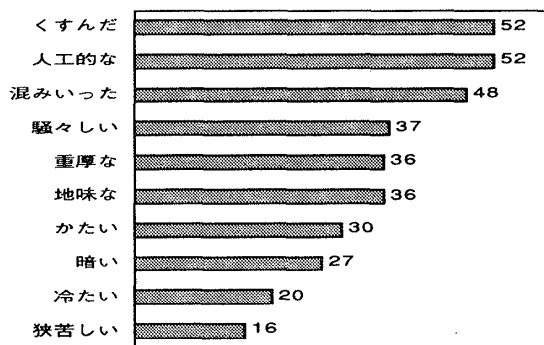


図1 川崎市臨海部の現況のイメージ

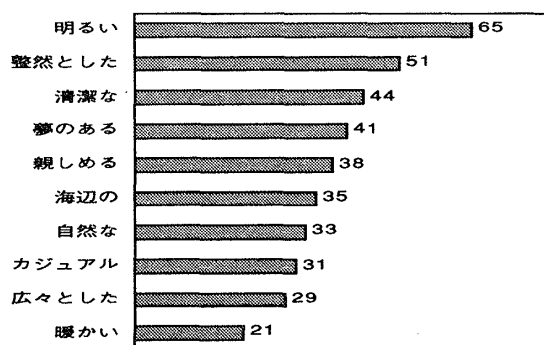


図2 川崎市臨海部に期待する将来のイメージ

その中で、イメージに関するものを紹介すると、現在の臨海部には、くすんだ・混みいった・騒々しい・暗い・冷たい・狭苦しいというマイナスイメージと、工業地区の特性としての、人工的な・重厚な・地味な・かたいなどのイメージが上位を占めた。(図1)

それに対し、将来に求めるイメージは、明るい・整然とした・清潔な・夢のある・親しめる・海辺のなどの上記と反対のイメージが上位を占めた。(図2)

3 色彩調査

また、システム策定の前に、工場施設外装の色彩の現状を把握する調査を行なった。

調査対象は、対象区域内のバス路線から見える工場施設とし、施設の種類の工場建屋・倉庫・事務所・タンク・プラント・塀・煙突など429件で、調査用色票を用いて視感測色法によりマンセル値を記録する方法を採用した。

それらの集計結果の中から、工場建屋の壁面基調色の分布を表1に示す。分類は後述のカラーシステムに用いた建築物外装のために我々が考案した色相トーン分類法(表2)を用いている。

結果は表1に示すように明るい暖色系(YR・Y)の無彩色に近い色(N1・N2トーン)と低い彩度の色(L1・L2トーン)に集中して、スレートの色やク

表1 工場建屋の壁面基調色の色彩分布

【工場】メインカラーの総合計トーン頻度表												
トーン	N1	N2	N3	N4	L1	L2	L3	M1	M2	H	%	
R									0.9		0.9	
YR	3.5	5.3			5.3	5.3	0.9	2.7			23.0	
Y	23.0	8.0			21.2	4.4					56.6	
GY	0.9				0.9						1.8	
G					0.9			0.9			1.8	
BG		0.9								1.8	2.7	
B	1.8				1.8			2.7	1.8	1.8	9.7	
PB										0.9	0.9	
P												
RP												
N												
シルバー	2.7										2.7	
%	31.9	14.2			30.4	9.7	0.9	6.2	2.7	4.4	100	

表2 川崎市臨海部色彩ガイドラインに用いた色相・トーン分類

色相 トーン	R 赤系	YR 黄赤系	Y 黄系	GY 黄緑系	G 緑系	BG 青緑系	B 青系	PB 青紫系	P 紫系	RP 赤紫系	色相 トーン	共通
L1	9.5~8.0/0.6~1		9.5~8.0/0.6~2.5		9.5~8.0/0.6~2.0				9.5~8.0/0.6~1.5		N1	9.8~8.0/0~0.5
L2	7.9~5.0/0.6~1		7.9~5.0/0.6~2.5		7.9~5.0/0.6~2.0				7.9~5.0/0.6~1.5		N2	7.9~6.0/0~0.5
L3	4.9~1.0/0.6~1		4.9~1.0/0.6~2.5		4.9~1.0/0.6~2.0				4.9~1.0/0.6~1.5		N3	5.9~4.0/0~0.5
M1	9.5~6.0/1.6~7	9.5~6.0/2.6~7	9.5~7.0/2.6~7	9.5~7.0/2.1~7	9.5~6.0/2.1~5.0			9.5~5.0/2.1~5	9.5~5.0/1.6~5	9.5~6.0/1.6~7	N4	3.9~1.0/0~0.5
M2	5.9~1.0/1.6~7	5.9~1.0/2.6~7	6.9~1.0/2.6~7	6.9~1.0/2.1~7	5.9~1.0/2.1~5.0			4.9~1.0/2.1~5	4.9~1.0/1.6~5	5.9~1.0/1.6~7		
H	9.5~1.0/7.1以上				9.5~1.0/5.1以上						9.5~1.0/7.1以上	

L1~L3 : Low Chroma 1~3 M1~M2 : Medium Chroma 1~2 H : High Chroma N1~N4 : Neutral 1~4

リム・ページなどのよく見かける塗装色が大部分を占めている。彩度の高い色(Hトーン)は青系に若干(4.4%)見られる程度である。

4 カラーシステム

カラーシステムは、表現レベルと、ベースカラーとして広い面積に使う色の範囲の制限を組み合わせる形で構成した。表現レベルは次の3レベルである。

- 1 一般カラーデザイン地区
- 2 重点カラーデザイン地区
- 3 グラフィックデザイン拠点

一般カラーデザイン地区は周辺の環境に馴染むよう低彩度色を用い、騒色のない整った色彩環境を目指すレベルである。

重点カラーデザイン地区は積極的なカラーデザイ

ンによって、ダイナミックで楽しく活気のある工場景観に変えていこうとする地区に用いるレベルである。

グラフィックデザイン拠点は、特定の施設単体を選んで色彩の制限も設けず、自由にグラフィック処理を行いメッセージ性の高いランドマークとする場合に適用する。

一方、色彩の範囲はマンセル色相を用いて、次の5種に分け、更に一般地区と重点地区に分けて使用可能なトーンを設定している。

- 1 赤系の区域 RP・R・YRの色相範囲
- 2 黄系の区域 YR・Y・GYの色相範囲
- 3 緑系の区域 GY・G・BGの色相範囲
- 4 青系の区域 BG・B・PBの色相範囲
- 5 紫系の区域 PB・P・RPの色相範囲

一般地区と重点地区の差は、壁面などの大面積に使用するベースカラーに使えない色として一般カラーデザイン地区ではM1・M2・Hトーンを、重点カラーデザイン地区ではHトーンを設定した。(図3)

いずれも、色相を限定するので、1事業所あるいは1区域では類似色相型の配色になるが、重点カラーデザイン地区内では、変化を演出するために、同一トーンの配色にする場合に限り、他の色相の色も許容することになっている。唯、いずれの地区もアクセントカラーとしてHトーンの使用は可能である。

以上の表現レベルと使用色相は事業者が自発的に選択したうえで、市役所と相談して決めるという自由度の高い方式になっている。

5 これからの展開

色彩ガイドラインの説明パンフレットや企業説明会などにより普及活動が行なわれると共に、市として積極的に相談にのる方針で進められる予定である。

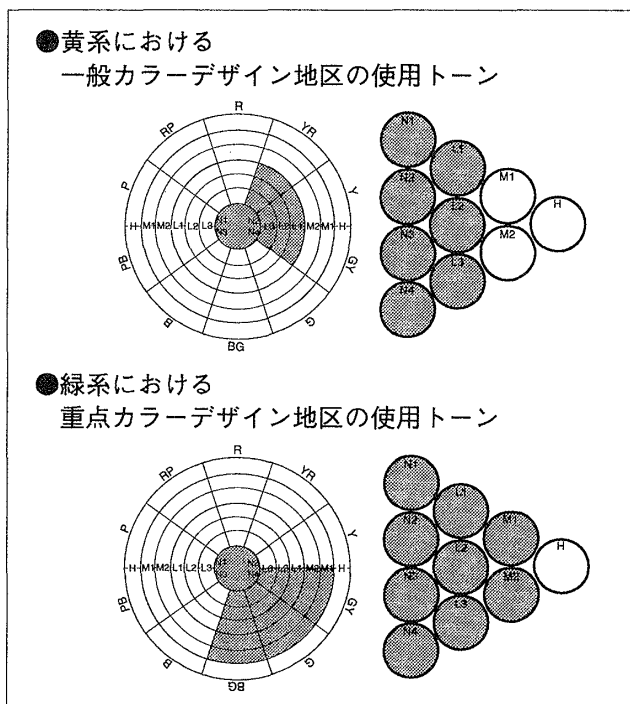


図3 色相分類と表現レベル別の使用トーン